



2024 年

7 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 7 月 7 日 : ルカ福音書 10 : 38 - 42 .

『 姉の手、妹の耳 』

・ 7 月 14 日 : ルカ福音書 12 : 13 - 21 .

『 生命と蓄財 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

イエスが幼子のころに両親に抱かれて、往復したエルサレムとベツレヘムの距離の約半分ほどの所に、ベタニアがあります。成人したイエスはガリラヤからエルサレムを訪れる際に度々、その近くのベタニアのマルタの家にも立ち寄りました。電話や交通手段など無い時代です。訪問の日時は殆ど不定（未定）でした。その日のイエスの訪問も、まさにそうでした。

イエスの目的は話をする事（？）でした。マルタの妹のアリアが、なぜか一人だけでイエスの話を始めから聞くことになります。残念ながら、話の内容は一切不明です。姉のマリアが、その間、どこで何をしていたのかというと、イエスの突然の訪問をもてなす準備を始めていたのです。この時、当のイエスは自分の話を聞くことも、自分をもてなすことも、どちらも要求していません。家に辿り着くなり眼前のマリアに語り始めます。

さて、台所であくせく働くマルタにはイエスの御声はとどいていたのでしょうか。いや、困ったことに彼女は、妹のマリアが、傾聴を中断し、もてなしの準備に加わるようにイエスの口から命じてほしいと、要求します。自分の主張を正当化する“巧妙な手段”として。彼女は“仕向けた”のです。誰を、そう、妹ではなくイエスの方を。しかし、イエスは「必要なことはただ一つ。マリアは良い方（傾聴）を選んだのだ」と、マルタを諭すのでした。ただ、イエスが“仕向けられる”、とは、これいかに。

そう言えばある時、イエスを歓迎しないサマリア人のことで、弟子のヤコブとヨハネの兄弟がイエスに話を持ちかけたことがありました、「お望みなら、天から火を下し、彼らを焼き滅ぼすように言いませんか」と。しかし、この二人にはそんな力も権限もなければ、天を動かす方法も知りません。彼らは体よくイエスに仕向けて事を成し遂げようとしたのです。もちろんこの後、彼らの挑発はイエスから一喝される運命にありました。

個人の都合や怒りで、神を動かせると信じるのは間違いです。けれども人間は時々、巧妙にこの過ちを犯します。願い求めるのではなく、仕向けるのです。しかし、欺瞞は直ちに神に見破られ（しっぺ返しを食らい）ます。その日のベタニアで起きていたことを時々思い起こしてみましょう。

主に背を向けることよりも、傾聴を選んだ方が正しかったことを。

《 命と蓄財 》

自分のために富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ。（ルカ福音書 12：21）

「このとおり」とは、いったいどういうことでしょう。「人の命は財産にはよらない（所有物から生じることはない）からである」とイエスは明言します。有り余る財産のために、大きな倉を建てて、遊んで暮らそうとしても当人が長生きできる保証がなければ、いったい誰のための財産なのかと、いとも簡単な譬えを用いてイエスは語ります。自分はそんな財産分与の裁判人でも調停人でもない。裏を返せば、この手の問題は、どこまで行っても“信仰”とは無縁の事柄のようです。

「命と蓄財」、この二つを軽々に結びつける術を知りません。多かれ少なかれ、誰にでもふりかかる深刻な事案ではあります。21世紀になると、これはもっぱら個人の死後の備えの問題として、金融機関で取り扱われそうです。さて、人類は多少とも、賢くなったのでしょうか？

イエスは様々な懇願を受理します、子供の病気を診てくれ、自分の症状を治してくれと。すると間髪入れず願いが叶い、それぞれ癒されます。それどころか失われたばかりの命までもとに戻されるのです。あたかも造り主の（独り子の）責任であるかのごとく、“命”に関しては神の専権事項として扱われます。ただ、財産分与の問題となると、こちらは一切、神の管轄下には置かれません。一方、人間はこれを自分の人生の重大問題として位置づけようとします。飲んで食べて、楽しく生きることも絡めて。もちろん、そんな願望にまともな答を出せる人はいません。イエスはこの問題には一切関わらないと“断言”します。依頼人はとり残されます。

マタイ福音書の19章21節に金持ちの青年の話が出ています。ユダヤの律法を遵守しているという彼に、イエスはこう進言します、「（あなたが）もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り、貧しい人々に与えなさい。そうすれば天に宝を積むことになる」。

彼はイエスの弟子になろうとしていたようです。場合によっては彼の財産は、使徒たちの時代のように宣教にも役立ったかもしれないのです。

ところがイエスの答は真逆でした。将来の宣教のためにではなく、直ちに、本人の一存で「売って、貧しい人々に分け与えなさい」と。さて、もともとの彼の、イエスに対する質問は、以下のとおりです、

先生、永遠の命を得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか？（同書 1・9：16）

この質問は、“良きサマリア人の譬え”（ルカ福音書 10 章 25 節以下）を聞かされたユダヤの律法の専門家が、はじめにイエスに問うていたことと同じです。二人に共通しているのは、どちらも、“自分には非の打ちどころがない”というものです。金持ちの“主張”と律法の専門家“自己正当化”には、何か深い関係がありそうです。

一方、今日の、イエスに財産分与の仲介を持ちかけた人物は、飽く迄これを自分と兄弟だけの問題として考えているようです。“永遠の命”とは無関係に、この世の思い煩いだけに終始しているのです。信仰心のかけらもなく。不幸にも「神のために豊かに」なることには一切興味を示しません。この記事は、ルカ福音書にのみ記されています。マタイもマルコもヨハネもこのエピソードには触れません。何ら解決策が示されていないからでしょうか。

イエスは、このケースでは一方的に単純明快な譬えを語るだけで、“質疑応答”には及びません。譬えが、あたかも能天気な依頼人の人生そのものの如く、分与された財産と共に、楽をして生きながらえる命の保証はどこにもないことが示されるのです。

いずれにしても、寿命と財産、帳尻合わせが絶対に不可能なこの問題で、思い煩うことは、たしかに愚かなことなのかもしれません。

ただ、もしこの依頼人の心の中に、“永遠の命”への思いが、ほんの僅かでもあったならば、イエスはひきつづき彼と語り合うことを厭わなかったかもしれません。「天に宝を積む」という選択肢が彼には与えられ、その方法が示されたかもしれないのです。神と人とは共に栄光へと至る道筋が。